

『甘やかな共謀』

著：沙野風結子

ill：小路龍流

——一五〇六号室、だったな。

扉に打たれた部屋番号を確かめながら、間接照明と足元灯に浮かび上がる通路を歩いていく。部屋に近づくとつれて、自然と背筋が伸び、身が引き締まっていく。

『嫌ってぐらい感じさせてやるから、俺と会えよ』

少しざらりとした低音の音が耳の奥に甦(よみがえ)る。

「面白い。感じさせてもらおうじゃないか」

そう呟いて、圭祐は一五〇六号室の前で立ち止まった。

ひとつ深呼吸をして、拳をドアに三度叩きつける。

静けさが通路に満ちて……ドアがゆっくりと内側へと開かれた。

「早かったな。飛んできてくれたんだ？」

「……」

わずかに高い位置からそそがれる鋭い眼差しに、圭祐は一瞬にして射(い)竦(すく)められていた。

彼は、不遜な顔つきをした青年だった。

色を落としてあるつややかな髪は、奥二重の目を半ば隠すほどの長さだ。鮮やかに通った鼻筋に、引き締まった輪郭。整った顔立ちだが、唇のふっくらした大きな口元が、無軌道な子供のような婀(あ)娜(だ)っぽさを印象づける。

圭祐との身長差は四、五センチといったところで、ごつくはないがしっかりした身体つきをしているのがコートラインでわかった。

二十代半ばぐらい——圭祐よりいくつかわ若(わ)そうだ——で、明らかに堅(かた)気(ぎ)でない空気を醸(か)だしている。

仕立てのいい黒いロングコートを纏(まと)った長身はただドアに手をつけて立っているだけなのに、見る者の心を無性に刺激する華麗(わい)さがあつた。

圭祐はテレビ局勤務(くわむ)だけに芸能人(げいねん)を目にする機会(きかい)も多いのだが、波(なみ)に乗(の)っている芸能人(げいねん)たちが発(は)している独特(とく)の輝(かがや)きと同種(どうしゆ)のものを、青年(せいねん)から感じる。

「……きみが、キリトか？」

答(こた)える代わりに、青年(せいねん)はふっと口角(くちかく)を上げた。

わずかな表情(へいしやう)の変化(へんか)だけで、彼の印象(いんしやう)は甘(あま)やかなものへと塗(ぬ)り替(か)えられる。

「どうぞ」

キリトがすいと掌(てのひら)を上(う)にして、室内(しやう)を示(し)す。

自分が仕事(しごと)で来たことを失念(しつねん)しかけていた圭祐(きゆう)は表情(へいしやう)を引き締(し)めて、キリトの横(よこ)を通(と)り抜(ぬ)けた。

と、彼(か)から匂(にお)いがした。

深(ふか)みのある麝(じゃ)香(かう)と、雨(あめ)の匂(にお)い。それと……。

——鉄(てつ)の匂(にお)い？

眉(まゆ)を顰(しか)めながらも、圭祐(きゆう)はたゆみない足取(あしどり)で室内(しやう)へと入(い)っていく。

クイーンサイズのベッドが置かれた部屋は、ベージュとダークグリーン、ブラウンを品よく組み合わせた内装で、それなりの広さがある。カーテンの開かれた大きな窓からは、蛍光色のネオンが煌めく新宿の眠らない夜景が広がっていた。その窓際にはソファセットが置かれている。

とりあえず重い鞆を降ろし、圭祐は名刺入れから一枚抜いて、相手に差し出した。「東方テレビ報道局、ニュース・ダブルツールのディレクター、雨宮圭祐です」

両手で差し出した名刺を、キリトは片手で乱暴に取り上げると、ちらとも見ずにコート

のポケットに突っ込んだ。

「テレビで観るより、いい男じゃん」

リポーターとして圭祐の姿がテレビに流れることはあるから、それで観たのだろう。

キリトの擲(や)揄(ゆ)するような言葉を、圭祐は流した。

「カメラを回しながら話を聞かせてもらってもいいかな？」

「随分、がつついてんのな」

「これでも忙しい稼業なんだ」

圭祐はコートをクローゼットに掛けると、鞆をソファセットのある部屋の奥まで移動さ

せた。カーペットに跪(ひざまず)き、機材を取り出していく。

キリトはソファに腰を下ろして、圭祐を眺(なが)めていた。瞬きの少ない目で凝視されるのは、心地悪い感じだ。

三脚を立て、それにデジタルビデオカメラをセットする。

被写体のほうにレンズを向けて、液晶モニターになっているファインダーを覗く。

「顔は映らないアングルにしるよ」

ざらざらした粒子のモニター画面のなかで、ソファに深く腰掛けて、革のパンツに包まれた長い脚を組んだキリトが言う。

「わかった」

そう答えながらも、被写体の俳優ばりのカメラ映りに、思わず見入ってしまう。

キリトは、自分を効果的に見せ、相手を魅了する術(すべ)を熟知しているようだった。

わずかな仕種——たとえば顎のラインを軽く指先でなぞるような、そんななんでもない仕種ひとつで人の視線を擲(から)め捕(と)る。

ファインダー越しに見詰められれば、うずうずするような妖しい気持ちを揺り動かされる。

いままで圭祐は同性にこういう揺らされ方をしたことがなかった。

——オーバーワークで、とち狂ってるのかな。

軽く自嘲ぎみに思いつつ、ひと通りのセットを終え、圭祐はピンマイクを手に取った。

「これは、マイクだ。コートを着たままがいいなら、なかにつけさせてもらおうよ。この四角い受信機を腰につけて、マイクは襟元につけるんだ」

そう説明しながら近づいていくと、ふいにキリトが表情を硬くした。大きな仕種でコートの前合わせの胸元を掴んで、立ち上がる。

「軽く酒でも飲んでからにしようぜ」

部屋のミニバーへと向かうキリトに、圭祐は声をかける。

「アルコールはやめてくれ。話の信(しん)憑(びょう)性(せい)に問題がでる」

「つまんねえの」

後ろ姿の広い肩を竦めて、キリトが冷蔵庫を開ける。

——ネタが本物かどうか、かなり怪しそうだな。
キリトが戻ってきて、プルトップを開けたブラックの缶コーヒーを差し出してくる。
「朝までたっぷり時間があるんだ。目を覚まして、取材してくれ」
「……ああ。ありがとう」
そういえば、喉が渴いていた。
受け取った缶に口をつけて、そのまま一気に半分ほど飲み干す。身体のなかを冷たい液体が通っていく。
「ところでさ、具体的な謝礼の話、まだしてねえよな」
すぐ目の前に立ったキリトが言う。……また、鉄の匂いがした。生臭いような鉄の匂い。
嗅(か)いだことのある匂いだ。
——なんだった？ これは……。
「この部屋の料金はこちらで持たせてもらう。だから、テレビ局からきみに払うのは、この部屋代プラス謝礼として——」
冷たいものを飲んだはずなのに胃が熱い。
圭祐は言葉を切って、腹に手をやった。そして、自分の掌がじつりと汗ばんでいるのに気づく。
もわんとした耳鳴りがして、背筋にざわざわと寒気が走る。
「もう、こんなに汗かいてんのかよ。クスリに耐性ねえんだな」
濡れた額に触れてくる手を、圭祐は叩き落とした。
きつく眉を顰めて、キリトを睨(にら)む。眼球がうまく動かない。像がぶれて、視界が揺れる。床がふにやりと柔らかくなっていて、立っているのが精一杯だった。
「コーヒーに、なに、か、入れたのかっ」
「初対面の人間の出したものに素直に口つけるなんて、あんた隙(ひま)ありすぎだっつーの。それでホントにやり手の報道マンなわけ？」
にやりと笑うと、キリトは手を突き出してきた。肩をドンと押される。
圭祐の手から落ちた缶が、黒い液体を撒(ま)き散らして空中をスピンする。それが、コマ送りの画面のように見えた。缶が床に接触した途端、急に時間の速さが元に戻って、勢いよく転がりだす。壁にアルミ缶がぶつかる音が、妙に鮮明に耳の奥で弾けた。

本文 p23～30 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>